ミラノのアンブロシウス『信仰について（*De fide*）』の一・二巻と三・四・五巻の神学的文脈の相違を巡る一考察

――イエス・キリストの生成に関する説明を中心に――

戸根裕士

目次

はじめに
1『信仰について』一・二巻と三・四・五巻の相違に関する問題設定
2『信仰について』のキリスト論の検討
2・1『信仰について』一・二巻のキリスト論について
2・2『信仰について』三・四・五巻のキリスト論について
2・3『信仰について』一・二巻と三・四・五巻の間のキリスト論の相違について
3『信仰について』のキリスト論の神学的文脈の検討
3・1『信仰について』一・二巻のキリスト論の神学的文脈について
3・2『信仰について』三・四・五巻のキリスト論の神学的文脈について
3・3『信仰について』一・二巻と三・四・五巻の間のキリスト論の神学的文脈の相違について
まとめ

はじめに

本論文ではミラノのアンブロシウスの主著の一つ『信仰について』全五巻を取り上げ、その一・二巻と三・四・五巻のキリスト論を各々整理して、その上で双方の神学的文脈の相違を提示する。そこでまず『信仰について』の一・二巻と三・四・五巻の出版の背景を簡潔に要約し、双方の神学上の相違の論点を指摘する。次にその論点に則して各々のキリスト論を検討することで、「創造する」(creare) という用語の回避という一・二巻の独自の関心、それに加えてイエス・キリストの人としての生成を巡って一・二巻と三・四・五巻の間の説明の相違などが判明する。さらに神学的文脈を整理すれば、一・二巻には過去の公会議の合意やミラノの教派対立に対する配慮が確認出来るのに対して、三・四・五巻の中の焦点は一・二巻に対する批判に応じた過去の代表的な議論の適用であった。そしてこうした神学的文脈の相違が、周囲の教会内部の情勢の変化に対応していたという点で以って結論としたい。

1. 『信仰について』一・二巻と三・四・五巻の相違に関する問題設定

『信仰について』はアンブロシウスの著作の内で最も影響力のあった著作と考えられる。というのも本著作の一部が四百三十一年年のエフェソス公会議と四百五十一年のカルケドン公会議の中、ラテン世界の教父ではただ一人だけ引用されたからである。加えて本著作の皇帝グラティアヌスに対する影響も忘れてはならない。[1] 何しろ三百八十一年のアクイレイア公会議でホモイオス派[2]の司教数人が解任されたのは、本著作のアンブロシウスの働きかけの結果であったとされる。[3] それ以後、グラティアヌスは明確なキリスト教優先の政策を施行することになり、元老院の建物から伝統的なローマの宗教の立像が撤去され、そのローマの宗教の礼拝に必要な資金が国庫から支出出来なくなる程の事態となった。[4] 従ってアクイレイア公会議以後の皇帝の政策の変化は、キリスト教の国教化に向けた変化の決定的な転換点であったと考えられる。

こうした『信仰について』という著作は全五冊で以って全体を成すが、その一・二巻と三・四・五巻の出版の背景に

は明確な相違が存在する。一・二巻の出版の背景を考えてみると、出版年度は三百七十八年の夏か三百八十年の初頭のどちらかで不確かではあるものの、[5] その出版の理由には三百七十八年以降のミラノのホモイオス派の勢力の伸長に伴ってアンブロシウスに対する一方的な批判が高まった点が明確に挙げられる。[6] 他方で三百八十年後半に[7]三・四・五巻が出版された背景には一・二巻に対するラティアリアのパラディウスの批判が決定的に存在したが、当初はこの続刊の出版は想定に無く、ホモイオス派に対する徹底的な批判の必要から三・四・五巻の出版がやむを得なく企画されたのであった。[8] こうした一・二巻と三・四・五巻の出版の背景を比較すると、この予想外の三・四・五巻の出版という事情から次の二点が理解出来る。まずは、一・二巻の中のホモイオス派に対するアンブロシウスの説明が未だ十分ではなかった点である。次に、一度は承認したはずの皇帝に宛てて再度も同じ著作名でニカイア派の信仰を説明せねばならぬ程にアンブロシウスに対する批判が厳しくなった点である。[9] こうした事情に加えて、ミラノ司教に就任した三百七十四年以後の数年間、ニカイア派に対するアンブロシウスの言及が確認出来ない事実を考慮すると、三百七十四年から僅か後にニカイア派の正統性の確立とホモイオス派に対する批判が急速に必要になった背景が明確になる。そして重要なのは、こうした教会の情勢の変化というのが、三百七十八年のゴート族との抗争を期に直ちにキリスト教の国教化に向かう後期ローマ帝国の変貌の過程と並行するという事実である。このキリスト教の国教化の為に三百八十一年のグラティアヌスとアンブロシウスの主導のアクイレイア公会議の影響が決定的であったのならば、三百八十年後半の皇帝に宛てたニカイア派の信仰についての説明の書物の性質の変化というのは、教会内の派閥の対立ばかりでなく、ローマ帝国全体にとっても意味があることになる。

そこで『信仰について』の一・二巻と三・四・五巻の内容の相違は一層重要になってくるのであるが、こうした双方の相違は従来の研究ではあまり論点に挙げられなかった。例えば、論敵たるホモイオス派の「不同」（dissimilis）という概念の反対語を巡る見解の一・二巻と三・四・五巻の相違に言及するマルクシース（C. Markschies, 1995）の指摘[10]が存在するが、それでも背景の神学的な文脈の相違並びにその相違に対する教会内部の情勢の変化まで含む論考は確認

出来ない。従って本論文ではこうした射程を念頭に置いて一・二巻と三・四・五巻の相違を検討する。そして、その際に重要な論点になるのはイエス・キリストの生成の説明である。何故かというと、ホモイオス派に対する決定的な批判点はイエス・キリストの生成の説明の誤謬であって、その批判と応答が、ニカイア派の信仰についてのアンブロシウスの説明の一起点になっているからである。実際、このイエス・キリストの生成に関する説明にはアレイオス派に対する従来の批判の完成に貢献した独自の意義があるといわれる。これはヘルマン（L. Herrmann, 1958）の指摘であった[11]。このヘルマンの指摘に従うと、そもそもアンブロシウスのキリスト論の見解に独創性は不在であるが、それでも人間に適用すべき見解の不当な拡大解釈という観点で以ってアレイオス派に対する従来の批判を総合した点で重要であるという[12]。同じくウィリアムズ（D. Williams, 1995）もイエス・キリストの生成を巡るアンブロシウスの説明に独創性を認定せず、それは単にラテン語圏の典型的なアレイオス派批判の反復であり、一・二巻と三・四・五巻の間の相違というのも、単に同様の議論の精密さの程度に過ぎないと指摘した[13]。こうしたヘルマンやウィリアムズの説に対してイエス・キリストの生成に関するアンブロシウスの説明に独創性を容認するのはフーン（J. Huhn, 1957）の研究であった[14]。そしてフーンの見解に従うと、その独自性とは処女懐胎というイエス・キリストの生成の固有性、並びにそれに伴う無罪性の確立であった[15]。以上、イエス・キリストの生成という論点は『信仰について』のみならず、アレイオス論争全体の中や、またアンブロシウスの思想自体にとっても重要であることが判明した。それではこうした点に留意して、実際に一・二巻と三・四・五巻のキリスト論の相違を検討したい。まずは二章で各々のキリスト論の読解を経て、双方の相違点を整理する。次に三章で各々の神学的な文脈にまで検討の範囲を拡大して、互いの神学的文脈の相違の理由を教会内部の情勢の変化に照らして提示したい。

2. 『信仰について』のキリスト論の検討

2. 1. 『信仰について』一・二巻のキリスト論について

それではまず『信仰について』一・二巻のアンブロシウスのキリスト論の検討を行いたい。そこで注目すべき点は

キリスト論の中でもイエス・キリストの生成のアンブロシウスの説明であった。そして、その生成の仕方の説明にはホモイオス派に対する批判が前提になっていて、アンブロシウスはその批判に則して神としての生成と人としての生成を区別する。それでは早速、そのホモイオス派に対する反論に従ってアンブロシウスの主張を読解したい。

アンブロシウスの理解に従うと論敵のアレイオス派たるホモイオス派[16]の誤謬というのは、「創造する」（creare）という用語で以ってイエス・キリストの生成を説明した点にあった[17]。換言すると、永遠の時点で父なる神から生成する仕方ばかりでなく、人間としても生成する在り方に対してまで「創造する」（creare）という用語を適用したのがホモイオス派の誤謬というわけである[18]。では仮にホモイオス派の主張に従ってイエス・キリストが他の人間と同じ様に単に創造されたとすると、イエス・キリストと他の全ての人間の間の区別が解消されるという結論を免れ得ない[19]。それに対してアンブロシウスは、生成の仕方の説明の中で、イエス・キリストと他の全ての人間の間の明確な相違を指摘した。まずは第一に、起因の無い特別な在り方で神から「誕生した」（genitus）という点で以ってイエス・キリストと全ての人間は区別されるという[20]。通常この「誕生した」（genitus）という用語の使用には、何かからの起因という意味内容が含意されているが、このイエス・キリストの神からの誕生に限り、その通常の場合と異なって不可知な特別な在り方であるという[21]。続いて、イエス・キリストが他の全ての人間と異なる第二の点を挙げると、それはイエス・キリストが母マリアから性的な関係無しに「出生した」（natus）という事実である[22]。他の人間と同様に十字架などで受苦する人間の主体というのは、神から「誕生した」（genitus）状態ではなくマリアから「出生した」（natus）状態であるが、その肉体を伴う状態は処女懐胎という特別な出産に基づいていて、他の人間の存在と全く異なっていた[23]。以上のイエス・キリストの生成に関する二点で以ってアンブロシウスは、イエス・キリストと全ての人間の間の明確な区別を説明し、ホモイオス派の説明の無分別を批判するのであった。

このようにイエス・キリストの生成というのは、「誕生した」（genitus）と「出生した」（natus）という区別によって説明されたが[24]、ここで注目したいのがその際に「創造する」（creare）という用語を回避した点である。というのも、

イエス・キリストが人としても生成した以上は神自身との区別の点で被造物であり得るから「創造する」(creare)という用語は適切かもしれないが、しかしその場合は人間の状態という観点で他の被造物や人間との区別が曖昧になるからである。そこでアンブロシウスは人としての生成に関する聖書箇所の解釈の場合、単純に被造性を認定せず、神からの特別な誕生の説明の後に、母マリアからの出生を位置づけた[25]。従ってイエス・キリストの生成に関する説明でアンブロシウスが否定するのは、神からの生成を「創造する」(creare)と解釈する見解ばかりではなく、その否定には、神からの特別な生成を容認するが人間としての生成に「創造する」(creare)を同時に適用する見解までも含まれた[26]。

2．2．『信仰について』三・四・五巻のキリスト論について

では次に一・二巻に対する批判に応答する為に予期に反して出版された『信仰について』の三・四・五巻を検討の対象としたい。そこで一・二巻との比較の為に読解の焦点は、三・四・五巻のイエス・キリストの生成の説明に向けられる。そして、ここでもまたホモイオス派に対する批判が前提になっているので、その批判点を含むアンブロシウスの主張の読解が課題となる。

アンブロシウスの理解に従うと論敵のアレイオス派たるホモイオス派の誤謬は何かといえば、「成った」(factum esse)という表現を神としての生成に関係させた点である[27]。本来その表現は人間としての生成に使用するべきものであって、神としての生成に適用したのはアレイオス主義の倒錯であった[28]。こうしたホモイオス派の主張に対して、アンブロシウスは神としての生成と人としての生成の間の区別を提示する。それというのは、一方でイエス・キリストの神としての生成は、不可知な事柄として単に「出生した」(natus)と表現されるのに対して、他方で人としての生成にこそ、ホモイオス派の誤用した「成った」(factum esse)という用語が適用されるべきであるという[29]。そして、このイエス・キリストの人からの生成の「成った」(factum esse)という用語は、ここでいう「創造する」(creare)の意味ばかりでなく、他の意味をも含意していると述べられる[30]。その他の「成った」(factum esse)の意味とは、「我々

の為に成った」（nobis factum esse）という救済論的な内容であった。[31] というのは、子なる神たるイエス・キリストが固有な仕方で人としても生成することには、他の全人間を含めた被造物の救済の為の業の実行が包含されているからである。[32]

以上、こうしてアンブロシウスは「出生した」（natus）と「成った」（factum esse）という用語でイエス・キリストの生成を説明した。[33] そしてここで注目したいのは、この「成った」（factum esse）という人としての生成の説明の中で子なる神の固有性が明示されている点である。換言すると、神からの特別な仕方の「出生した」（natus）は父なる神とイエス・キリストの同一性を保証するが、同時にそれに加えて人間としても「成った」（factum esse）ということで以って、全ての人間を含めた被造物の救済という子なる神の業の固有性が明確になるのである。

2．3．『信仰について』一・二巻と三・四・五巻の間のキリスト論の相違について

上記で以って『信仰について』一・二巻並びに三・四・五巻の各々のキリスト論の読解を終えた。それではここで、双方のキリスト論の構成を比較し、一・二巻と三・四・五巻の間のキリスト論の相違を以下の二点から指摘したい。

その第一の相違点というは、一・二巻で意図的に回避されていた「創造する」（creare）という曖昧な意味が、三・四・五巻の人としての生成の説明の「成った」（factum esse）という表現の中に包含している点である。ここで注意すべきは「創造する」（creare）という用語に対する一・二巻の配慮であり、その配慮が向けられるのは、イエス・キリストの人間の状態と他の被造物の区分を不明確にする曖昧さであった。そこで三・四・五巻のその語の含意を考慮すると、後にその用語に対する一・二巻の配慮に変更があったと考えられるかもしれない。以上、取り敢えずこの時点で分かることは、この「創造する」（creare）という意味の存否という点で単に双方の見解の間の相違が指摘されるばかりではなく、その語の曖昧さに対する配慮の変更の有無までが論題になるという点である。

続いて一・二巻と三・四・五巻の第二の相違点であるが、それは一・二巻では人としての生成に適用された「出生した」（natus）という表現が、三・四・五巻の中で逆に神から

の生成の明示の為に使用されているという点である。換言すると、一・二巻の中での「出生した」(natus)という用語の役割は人間イエス・キリストと全ての人間の間の区別の明確化であったのに対して、三・四・五巻の「出生した」(natus)という表現は、その区別に関する特別な意味も無く、神からの生成に適用されているからである。ここで注意したいのは一・二巻の中の「出生した」(natus)という用語の独自の役割である。実のところ一・二巻の中では、イエス・キリストの人間の状態と他の全ての人間の区別は、処女懐胎という特別で受動的な生成の観点から説明された。そうすると三・四・五巻の中で、その特別な意味であった「出生した」(natus)が別様に使用されるならば、その場合でのイエス・キリストの人間の状態と全ての人間との区分の説明は全く異なる展開になるかもしれない。その際に一・二巻の説明と比較すると整合性が存在しない可能性もある。以上、取り敢えずこの時点で分かることは、この「出生した」(natus)という用語の異なった使用という点で、単にその用語の意味の曖昧さが分かるばかりでなく、イエス・キリストと全ての人間の区分の説明の幾分かの相違までも焦点になるという点である。

以上、上記の二点で以って『信仰について』一・二巻と三・四・五巻の間のキリスト論の相違の読解としたい。

3. 『信仰について』のキリスト論の神学的文脈の検討

3. 1. 『信仰について』一・二巻のキリスト論の神学的文脈について

それでは『信仰について』のキリスト論の神学的文脈の検討に移りたい。そこでまず『信仰について』一・二巻のキリスト論の神学的文脈の読解を行う。ここではじめに、イエス・キリストの生成の説明の誤謬を回避する方法論上のアンブロシウスの配慮を従来のアレイオス論争の内容と比較する。続いて、『信仰について』以前のアンブロシウスの著作を検討することで、ミラノ司教に就任以来のイエス・キリストの生成の説明の継続性を指摘する。

まず生成の説明の誤謬を回避する一・二巻の配慮の神学的文脈の検討に当たって注意すべきは、神としての生成ばかりではなく、人としての生成に対してまでも「創造する」(creare)という用語が適用された点を批判するアンブ

ロシウスの見解である。一方でこの神としての生成に対するこの用語の適用に向けられた批判というのは、アレイオス論争の初期から通底する論点であり、この批判の組織化にはアレクサンドリアのアタナシオスが寄与したといわれる[34]。またこの批判点は地域を問わず多くの神学者の間でも共有されており、例えば三百四十三年のセルディカ公会議の信条にも明文化されていた[35]。それに対して他方で人間としての生成に対する「創造する」（creare）という用語の適用までもアンブロシウスは批判の対象に含めるわけであるが、ここで注目すべきはアンブロシウスのこの批判の念頭に三百五十九年のアルミニウム公会議の信条があった点である。というのも、アンブロシウスの『教会の譲渡を巡るアウクセンティウスに対する説教（*Sermo contra Auxentium de basilicis tradendis*）』の中で、『信仰について』と全く同様に、神でなく人間からの生成に対する「創造する」（creare）という用語の適用が誤謬として批判されており、その特徴的な誤謬はホモイオス派のミラノのアウクセンティウスの信奉するアルミニウム公会議の信条の中に確認出来ると言及されているからである[36]。加えて考慮すべきは、特に『信仰について』一・二巻の中でアルミニウムの公会議は批判的な対象として言及されており[37]、その背景にホモイオス派でミラノ司教の前任者であるアウクセンティウスを中心とした集団に対するアンブロシウスの警戒が依然として働いていたという事情があった[38]。そうすると一・二巻の中で神と人間の両方からの生成に対する「創造する」（creare）という用語の適用の批判に想定されていたのは、アルミニウム公会議に忠実なアウクセンティウスを含めたミラノのホモイオス派の勢力であったというわけである。さらにここで注意を払うべきは、このアルミニウム公会議に対する批判が三百五十九年以降のニカイア派の間でアレイオス派批判として一般的であったという事実である[39]。実際、コンスタンティウス二世が主導したアルミニウム公会議の見解はローマ帝国の殆ど全領域で採用されるようになり[40]、それ以後はニカイア派のアレイオス派批判の際には、このアルミニウム公会議の考え方が念頭に置かれるようになった[41]。例えばブリクシアのフィラストリウス[42]やヴェルチェッリのエウセビオス[43]などが挙げられる。するとここから分かるのは、アルミニウム公会議に対するアンブロシウスの批判は、確かにアウクセンティウスが想定されている点では地域の固有の事情が存在するが、その批判的な見解自体には独創性

は無く、三百五十九年以後のニカイア派の間で一般的なものであった点である。

続いて神としての生成と人としての生成の一・二巻の区分の説明の神学的文脈の検討に移りたい。そのアンブロシウスの議論で特徴的なのは、処女懐胎による人間イエス・キリストと全ての人間の間の区別であった。そこで注目すべきは、このアンブロシウスの議論とそれ以前の著作の間に継続性が存在した点である。三百七十四年に司教に就任以来、三百八十年前後の『信仰について』の出版まで教義学に関する著作は作成されなかったが、その間にも倫理を主題とした著作や聖書の注解書などが記されていた。確かにそれらの著作の中でイエス・キリストの生成の仕方は著作の主要な論点ではなかったが、各々の著作の主題に則してその生成の説明は重要な役割を担っていた。例えば『処女について（*De virginibus*）』の中で処女の純潔性の美徳を与えるのは、神から「誕生して」（genitus）マリアから「出生」（natus）したイエス・キリストだけであった。[44] 同様に『処女性について（*De virginitate*）』の中では純潔の象徴というのは、処女懐胎でマリアから「出生した」（natus）イエス・キリストの存在だけであって、決して「成った」（factum esse）人間の状態ではなかった。[45] また聖書注解の著作に視点を転じても『カインとアベルについて（*De Cain et Abel*）』の中では、全ての人間と比較して唯一人だけ罪の影響の無い存在として、処女懐胎で「出生した」（ortum）イエス・キリストが挙げられる。[46] ここで改めて注意を払うべきは、処女懐胎という特別な出生の仕方で以って人間イエス・キリストと全人間が区別されたという『信仰について』一・二巻の中の見解である。そうするとミラノ司教に就任以後の著作の検討から判明するのは、それらの初期の著作と『信仰について』の一・二巻の説明の間の継続性の存在であった。

3．2．『信仰について』三・四・五巻のキリスト論の神学的文脈について

続いて『信仰について』三・四・五巻のキリスト論の神学的文脈の検討を行う。ここではまずこの続刊の出版の理由となった一・二巻に対する批判を取り上げ、その三・四・五巻のキリスト論に対する影響を指摘する。続いて三・四・五巻の「成った」（factum esse）という人間からの生成の説明

に注目し、以前から地域を問わず幅広く共有されていたキリスト論との類似性を提示する。

そこでまず一・二巻に向けられた批判の三・四・五巻に対する影響を考えるに当たって注意すべきは、本性では同一の父なる神に対する子なる神の固有の業の明確化という三・四・五巻の主要な論点である。そしてその理由に一・二巻に対するパラディウスの批判の影響があるというのがウィリアムズの説であった。[47] 実際にパラディウスの批判によると、一・二巻の中で神からの不可知な生成で以って父なる神と子なる神の同一性は述べられているが、それ故にその内部の父なる神に対する子なる神の固有性が明確ではないという。[48] その結果、三・四・五巻の中では神としての生成と同時に人間としての生成の説明で以って、子なる神の固有性が明確な言及の対象になった。[49] そうすると上記の検討の通り、その子なる神の固有性とは全ての人間を含めた被造物の救済であるという三・四・五巻の説明に至ったというわけである。ここから分かることは、三・四・五巻のキリスト論の前提に一・二巻の子なる神の固有性の説明の不十分さに対するパラディウスの批判が存在したという点である。

続いて神としての生成と人としての生成の三・四・五巻の区分の神学的文脈を検討したい。ここで注目すべきことは、「成った」（factum esse）という人としての生成の能動的な説明に、創造という業ばかりでなく被造物の救済の業まで含意されていた点である。そしてこのアンブロシウスの説明が、アレイオス派批判の代表的な存在であったアタナシオスの主張と類似しているというのはファラー（O.Faller, 1962）の指摘であった。[50] 現実にアタナシウスはアレイオス派に対する批判を体系化した神学者であり、主に東方で活動していたが、暫し追放され各地を渡ったこともあって、地域を問わずローマ帝国の各地で影響力があった。そしてファーラー（1962）曰く、そのアタナシウスの著作の内の『アレイオス主義に対する議論（*Κατά αρειανών λόγος* / *Orationes adversus Arianos*）』の中のイエス・キリストの生成に関する見解が、『信仰について』の三・四・五巻のキリスト論と類似しているという。そこでアタナシオスの同著作の主張の内容を確認してみたい。

アタナシオスのアレイオス主義に対する批判は、本来人間に適用すべき「成った」（ἐγένετο）という用語の使用で神からの生成を説明する点に向けられた。[51] その説明では、神が単に被造物の一つに変化したという観点が含意されて

いる。[52] そこでアタナシオスは、その用語が人としての生成に適用されるべきであると述べて、その説明に当たってヘブライ人への手紙三章二節が重要であると考えた。アタナシオス曰く、その聖書箇所の「彼を作った」（ποιήσαντι αὐτόν）は「創造される」（κτίζεσθαι）という点に還元出来て、その解釈の際に「成った」（ἐγένετο）や「作られた」（πεποίηται）、さらに「創造された」（ἔκτισται）や「形作られた」（πέπλασται）などの表現全ては同様の意味であると述べられた。[53] それに加えて、この「成った」（ἐγένετο）という観点の人としての生成の説明に使徒言行録二章三十六節の「主として、また油を注がれた者とした」（Κύριον καὶ Χριστὸν ἐποίησε）の意味を考慮すると、イエス・キリストの人としての生成には被造物全体の救済という業の側面も含意されていると分かる。[54] 換言すると被造物の肉体を伴うことで子なる神の固有の業が示され、被造物全体に対してその働きが波及するというわけである。[55]

そこで『信仰について』の三・四・五巻の「成った」（factum esse）というアンブロシウスの説明と比較すると、確かにアタナシオスの「成った」（ἐγένετο）という観点の説明では、創造ばかりでなく被造物の救済の業まで述べられている点が類似していると考えられる。こうした類似性はマルクシース（1995）も認定する所であった。[56]

3．3．『信仰について』一・二巻と三・四・五巻の間のキリスト論の神学的文脈の相違について

上記で以って『信仰について』一・二巻並びに三・四・五巻の各々のキリスト論の神学的文脈の読解を終えた。それではここで、双方のキリスト論の神学的文脈を比較し、一・二巻と三・四・五巻の間のキリスト論の神学的文脈の相違を以下の二点から詳細に説明したい。

まずもって第一の双方のキリスト論の神学的文脈の相違を検討するに当たって注目すべきは、「創造する」（creare）という用語に対する配慮に関する双方の見解の相違であった。一方で一・二巻の中の「創造する」（creare）という用語は意図的に慎重に回避されているのに対して、他方で三・四・五巻の説明では「創造する」（creare）という意味が人としての生成の説明の中に含意されていた。そうすると三・四・五巻の中で一・二巻のその用語に対する配慮が変更されたと指摘出来るかもしれないが、上記の双方の神学的

文脈の検討を参照するとその指摘は正しくないことが分かる。

一・二巻の「創造する」（creare）という用語の回避の背景には、アルミニウム公会議並びにミラノのアウクセンティウスを中心とする勢力に対する批判が存在し、そしてこの見解はアンブロシウス独自の考えでなく、三百五十九年以後のニカイア派の間での共通了解であった。そうすると一・二巻の約一年後に出版された三・四・五巻の中でこの配慮が不在になるのは奇異と感じるかもしれないが、ここで一・二巻に対するパラディウスの批判に注目したい。そのパラディウスの批判は子なる神の固有の業の不明確さに向けられており、実際にそれに応じた様に、予期に反して出版された三・四・五巻のイエス・キリストの生成の説明の中心は、「成った」（factum esse）という説明に含意する子なる神の救済の業であった。そしてこの三・四・五巻の説明は一・二巻と比較して全く異なっており、寧ろその説明にはアレイオス派批判で著名なアタナシオスの議論との類似点が多々確認出来るのであった。上記の「創造する」（creare）という用語の意味内容は、このアタナシオスの議論に類似する説明の中に確認出来るのである。以上、ここから分かるのは、三・四・五巻の中の「創造する」（creare）という用語に対する配慮の不在は一・二巻の見解の変更ではなく、その既刊に対する批判に早急に不用意ながら応じる為に過去の著名な議論を参照した結果であったといえる点である。そして三・四・五巻でこの配慮が不在であるからといって決してアルミニウム公会議に対する配慮が消滅したわけではないのは、パラディウスの批判に早急に応じる必要であった事情に加えて、そのアルミニウム公会議に対するニカイア派の共通の持続的な関心の存在から判明することである。

引き続き次に第二の双方のキリスト論の神学的文脈の相違を指摘したい。ここで注目すべきは、一・二巻で人間としての生成が「出生した」（natus）と表現されているのに対して、三・四・五巻では同じ表現が神としての生成に適用されていたという点であった。換言すると、一・二巻の中ではこの「出生した」（natus）という特別な受胎の方法で以ってイエス・キリストの人間存在と他の人間全てが区別されるのに対して、三・四・五巻の「出生した」（natus）という表現は不可知な誕生として、単純に神としての生成に適用された。そしてその代わり人間としての生成は「成っ

た」（factum esse）という観点で説明されることになった。但しその説明は、「出生した」（natus）という用語の独自の役割の不在の故に幾分かは異なるかもしれず、一・二巻の説明と比較すると整合性の不在が確認出来る可能性があった。そこで、このような人としての生成の説明の相違を双方の神学的文脈の観点から説明したい。

一・二巻のイエス・キリストの生成の説明の背景には、アルミニウム公会議並びにアウクセンティウスを中心とする勢力に対する批判が存在し、その際に課題というのは、イエス・キリストの人間の状態と他の全ての人間の間の区別であった。そこで「出生した」（natus）という処女懐胎という受動的な生成の観点で以って、その双方の区別が説明されたわけである。この説明は初期の著作の中にも確認出来て、処女懐胎による唯一の人間としての状態は純潔であり罪がないと述べられていた。それに対して三・四・五巻のイエス・キリストの生成の説明の背景には、既刊に対するパラディウスの批判に応じる必要性が存在し、その際の課題は子なる神の固有の業の明確化であった。そこでアタナシオスの議論を参照した上で、「成った」（factum esse）という能動的な生成の観点によって、自ら被造物と一体となって全被造物を救済する子なる神の固有の業が提示されたのである。そしてここで注目すべきは「成った」（factum esse）という神が主導する能動的な生成の観点では、イエス・キリストの人間の状態は単独では扱われず、寧ろ神と一体に成った人間の在り方が焦点になる点である。そしてその際に、「創造する」（creare）という用語で以って人間の状態の受動的な生成が扱われた場合でも、それは結局、上記の神が主導する能動的な生成の意味に還元されるのである。そうすると、この場合に人間としての生成の在り方の比較の対象というのは、全人間ばかりに限定されず被造物全体ということになった。それに対して一・二巻では処女懐胎という唯一の受動的な生成の説明の中で、イエス・キリストの人間の状態が独自の論点となり得て、その比較の対象は全人間に限定されるのであった。そしてその際に、「創造する」（creare）という用語で同様の受動的な生成が扱われた場合には、決して処女懐胎による受動的な生成と同一にならないのであった。以上、ここから分かるのは、一・二巻と三・四・五巻の双方の神学的文脈を考慮した場合に、互いの人間としての生成の説明は根本的に異なっており整合性は存在しなかったという点である。

まとめ

以上で以って『信仰について』の一・二巻と三・四・五巻の間のキリスト論の神学的文脈の相違の検討を行った。そして双方の「創造する」（creare）という用語に対する配慮の有無や人間として生成の説明の相違が、三百七十八年以後のアンブロシウスの周囲の教会内部の情勢の変化に対応していた点を確認した。ここで最後にそのアンブロシウスのイエス・キリストの生成の説明の独創性の存否について言及したい。

冒頭で紹介した様にヘルマン（L. Herrmann, 1958）やウィリアムズ（D. Williams, 1995）は独創性を容認しないのに対して、フーン（J. Huhn, 1957）は独創性の存在を主張した。けれども上記の検討を参照する限り、いずれにしても独創性の有無は『信仰について』に限定する限りでは現時点で如何とも判定し難い。というのも、その内容の中心というのは、特定の公会議の合意並びに地域の教派対立に関して共有されていた関心の展開と同時に、また突然の予期せぬ状況の変化に則した即時的な反応もそれ以前の説明と整合性無く共存しているのに留まるからである。こうした事情というのは、個人の思想の独創性の存否を簡単に断定するのにあまりに複雑であった。

しかし、この独創性の有無の問いを別にして、このような『信仰について』のキリスト論の不統一な側面というのは、当時のローマ帝国内の教会間の活発な論争の様子を示していると考えられる。想定される古代末期の神学論争の規模からは現存する以上の資料が状況に応じて流通していたと推測出来るが、その資料の一過性の故に敢えて残置された資料も少ないのではないか。そうすると、この当時のこうした通俗的な側面を如実に表したのが、独創性は容認され難くもミラノ司教の政治的影響力の故に評価され続けたアンブロシウスの著作であると考えられ得る。この点を指摘して本論考を終える。

（同志社大学大学院神学研究科博士課程（後期課程））

註

(1) グラティアヌスに対する『信仰について』一・二巻の影響を巡っては、古くから議論されている（H. F. Campenhausen, *Ambrosius von Mailand als Kirchenpolitiker*, (Arbeiten zur Kirchengeschichte 12), Berlin: de Gruyter, 1929, S. 42.）。その議論の主な論点には、『信仰について』でニカイア派に対するグラティアヌスの承認が確認出来るものの、後の三百八十三年の寛容令でホモイオス派が容認されるという不可解な点が挙げられる（Ibid.）。こうした指摘とは別に、実はグラティアヌスは『信仰について』を読んでいないのではないかという別の考え方も存在する（C. Markschies, *Ambrosius von Mailand und die Trinitätstheologie* (Beiträge zur historischen Theologie 90), Tübingen: Mohr Siebeck, 1995, S. 173.）。

(2) 本論文で度々述べられるホモイオス派について辞書の定義を付記する。ホモイオス派とは父なる神とイエス・キリストの関係を類似と考える勢力であり、三百五十九年のアルミニウム公会議並びにセレウキア公会議の合意に従っていた（W. Löhr, 'Homöer' in: *RGG 4*, Tübingen: Mohr Siebeck, 2000, S. 1880-1882.）。

(3) C. Markschies, 'Einleitung' in: Ambrosius, *De fide* (ad Gratianum), übersetzt und eingeleitet von C. Markschies (Fontes Christiani 47), Turnhout: Brepols, 2005, S. 19.

(4) Ibid.

(5) 『信仰について』一・二巻の出版を三百七十八年の夏とするのは、これはファラーの意見である（Ambrosius, *De fide*, recensuit O. Faller (CSEL 78), Vindobonae: Hoelder-Pichler-Tempsky, 1962, p.8, prolegomena II, 2, 3.）。その根拠は、一巻の序文のグラティアヌスに向けた「全世界の皇帝」というアンブロシウスの表現であり、そこから一・二巻の出版の年度というのは、ローマ帝国の中でグラティアヌスが唯一皇帝として在位していた時期ということになる。つまりその時期とは、皇帝ウァレンスの死（三百七十八年八月九日）とテオドシウスの皇帝就任（三百七十九年一月一九日）の間の三百七十八年の夏というわけである。こうした『信仰について』一・二巻の出版の説明とは異なって、その出版年度を三百八十年と推測するのはゴットリープの説である（G. Gottlieb, *Ambrosius von Mailand und Kaiser Gratian* (Hypomnemata: Untersuchungen zur Antike und zu ihrem Nachleben; Heft 40), Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1973, S. 14-25.）。その根拠というのは、ゴート族との抗争の戦況の好転という一・二巻の記述であった。以上が『信仰について』の一・二巻の出版を巡る代表的な見解である。

(6) 『信仰について』一・二巻の出版の理由というのは、アン

ブロシウス自身の説明に従えば、ニカイア派の信仰の講解のグラティアヌスの要求であった（Ambrosius, *De fide* (ad Gratianum), übersetzt und eingeleitet von C. Markschies (Fontes Christiani 47), Tumhout: Brepols, 2005, S. 140, I, 1, 3.）。このアンブロシウスの説明をダッデン（H. Dudden, 1935）やパレディ（A. Paredi, 1960）などの研究は正しいとする（H. F. Dudden, *The Life and Times of St. Ambrose*, 2 vols, Oxford: Clarendon Press, 1935, p. 189. A. Paredi. *Saint Ambrose: His Life and Times*, trans. M. J. Costelloe, Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1964, p. 180.）。というのも、アンブロシウスがニカイア派の擁護者であると考えるからだ。しかし、ノータン（P. Nautin, 1974）は、こうしたアンブロシウス自身の出版の事情の説明に対して反対する（P. Nautin, 'Les premières relations d' Ambroise avec l' empereur Gratien. Le *De Fide* (Livres I et II)' in: *Ambroise de Milan. 16e centenaire de son élection épiscopale*, Yves-Marie Duval, 1974, p. 237.）。その理由にはまず、トリーアにいたグラティアヌスが、わざわざ五百マイル以上離れたミラノに在住の司教に信仰の内容を尋ねる必要がないという点が挙げられる（ibid.）。確かにアンブロシウスの存在は認知されていたかもしれないが、特別に皇帝が尋ねるのに相応しい理由は存在しないという。というのも、以前の著作で自らをニカイア信条の擁護者と見做す記述が確認出来ず、加えてその当時は如何なる教義学的な著作も記していないからである（ibid.）。続いて、出版の理由が皇帝の要請とする見解を検討すると、それに対する批判の第二のノータンの理由というのは、アンブロシウス以外の聖職者にニカイア派の信仰の内容を尋ねる機会が十分に存在したという事実である（ibid.）。例えば、近くにニカイア派の司教が存在し得た上に、遠方に問い合わせるにしても、ニカイア派の権威たる教皇ダマスス一世に対する質問が可能だからである（ibid.）。そこで、こうした事情を考慮した上でノータンの指摘する一・二巻の出版の理由とは、アンブロシウスに対するパラディウスの批判であった（ibid., p. 240.）。だからこそグラティアヌスはその批判の適切さの判断の為に、アンブロシウスに対して信仰の説明を要請したというのである。けれども、このようなノータンの見解に対しても不十分な点が指摘される。つまりは、出版の理由のアンブロシウス自身の説明に対するノータンの批判は適切であるが、パラディウスの批判の存在というノータンの一・二巻の出版の理由の説明は不十分であるという。これは、ウィリアムズ（D. H. Williams, 1995）の意見であった（D. H. Williams, *Ambrose of Milan and the End of the Nicene-Arian Conflicts*, Oxford: Clarendon Press, 1995, p. 142.）。その理由の一つには、一・二巻内のパラディウスに対する

言及の不在が挙げられる（ibid., p. 143.）。また別の理由に、批判の的となる程にアンブロシウス自身がニカイア派の擁護者の代表ではなかったというノータン自身の主張と矛盾するという点も存在する（ibid., p. 142.）。それでは、一・二巻の出版の理由は何であるかというと、ウィリアムズが指摘するのは、皇帝ウァレンスやユスティナを中心とするホモイオス派の勢力の増大である（Ibid., p. 143.）。まずウァレンスの動向について具体的に述べると、三百七十六年から三百七十八年の間にウァレンスがミラノに滞在し始めることでホモイオス派の影響力が大きくなったと考えられる（ibid., p. 136.）。それ以前にウァレンスはポエトウィウム（現スロヴェニア領 Ptuj）に滞在していたが、ニカイア派に対する批判で以って住民と対立してミラノに移って来たのであった（ibid.）。さらに、そのウァレンスを中心とするホモイオス派の勢力の増大にウルシヌスという聖職者も協力した。というのも、ウルシヌスは不正な選挙でダマスス一世と同時に教皇になったのであるが、やがてローマから追放されてしまったので、ミラノでダマスス一世のニカイア派に対抗すべくホモイオス派に加担したからである（ibid., p. 138.）。このウァレンスの動向に続いて、ユスティナを中心とするホモイオス派の勢力の拡大を説明したい。このユスティナとは、皇帝ウァレンティニアヌス二世の母であり代理人であって、このユスティナの周辺の勢力がアンブロシウスを異端として訴えたのである（ibid., p. 139.）。そうなった訳には、三百七十八年のアドリアノープルの戦い以降にイリュリア地方からミラノへ多くの避難民が到来したことが挙げる（ibid., p. 139.）。この大半はホモイオス派であって、こうした避難民のアンブロシウスに対する批判の要点は、避難民を救助せずに教会を分裂させて商売しているという点であった。従って、ウィリアムズの説によれば、こうしたホモイオス派のアンブロシウス批判の拡大が前提に存在して、グラティアヌスがその批判の真偽に関心を持ったことになる

（7）『信仰について』三・四・五巻の出版年度は三百八十年末ということで異論は無い。その理由は次の二点から判明する。まず一つ目の理由に挙げられるのは、三百八十年後半のアンブロシウスとグラティアヌスの往復書簡に一・二巻の既刊の記述が確認出来るという点である（Ambrosius, *De fide*, recensuit O. Faller (CSEL 78), pp. 8-9, prolegomena, II, 4-5.）。さらに定説の根拠の第二の理由は、三百八十一年出版の『聖霊について（*De spiritu sancto*）』の未刊の情報が『信仰について』の五巻の序文の中に発見出来るという点である（Ambrosius, *De fide* (ad Gratianum), übersetzt und eingeleitet von C. Markschies, S. 591, V, Prologus 7.）。これら二点を以って、定説では三・四・五巻

の出版年度は三百八十年後半頃ということになる。

(8) 『信仰について』三・四・五巻の出版が想定外であったという事情は、三百七十九年のグラティアヌスとアンブロシウスの往復書簡の読解から判明する（D. H. Williams, 'Polemics and Politics in Ambrose of Milan's De Fide' in: *Journal of Theological Studies* 46:1 (1995), p. 523.）。この往復書簡には、グラティアヌスがニカイア派の信仰に対するアンブロシウスの説明を承認し、さらに聖霊論の執筆を要請した記述が確認出来る。けれども、ここで不思議な点が発見出来る。それというのは、三百八十一年の二月（もしくは三月）の『聖霊について』の出版までに、皇帝の要請も無く既に承認されているはずの『信仰について』の続巻が出版されているという事実である（ibid., p. 524.）。ここから判明するのは、予期せぬ一・二巻に対する批判に向けて今一度反論し、再度ニカイア派の正統性を証明する必要が存在した点である（ibid., p. 525.）。

(9) Ibid., p. 528.

(10) C. Markschies, *Ambrosius von Mailand und die Trinitätstheologie*, S. 178.

(11) L. Herrmann, 'Ambrosius von Mailand als Trinitätstheologie' in: *Zeitschrift für Kirchengeschichte* 69 (1958), S. 212.

(12) Ibid., S. 209.

(13) D. H. Williams, *Ambrose of Milan and the End of the Nicene-Arian Conflicts*, p. 147.

(14) J. Huhn, *Das Geheimnis der Jungfrau-Mutter Maria nach dem Kirchenvater Ambrosius*, Würzburg: Echter-Verlag, 1957, S. 105-106.

(15) Ibid.

(16) 『信仰について』では論敵はアレイオス派と表記されているが、実際に想定されていたのはホモイオス派であり、この著作では意図的にその見解を曲解してアレイオス派として整理したといわれる（C. Markschies, *Ambrosius von Mailand und die Trinitätstheologie*, S. 178.）。

(17) Ambrosius, *De fide* (ad Gratianum), übersetzt und eingeleitet von C. Markschies, S. 222, I, 16, 102. または次の箇所を参考に挙げる（ibid., S. 220, I, 16, 100.）。

(18) Ibid.

(19) Ibid., S. 228, I, 17, 110.

(20) Ibid.

(21) Ibid.

(22) Ibid., S. 200, I, 12, 77.

(23) Ibid., S. 202, I, 12, 78.

(24) 凡そ一・二巻では神からの生成は「誕生」（genitus）であり、他方で人からの生成は「出生」（natus）と表現されるが、それでも例外は存在する（Ibid., S. 214, I, 14, 93.）。

(25) Ibid., S. 214, I, 14, 93.

(26) Ibid., S. 222, I, 16, 102.

(27) Ambrosius, *De fide* (ad Gratianum), übersetzt und eingeleitet von C. Markschies, S. 386, III, 6, 44. または次の箇所を参考に挙げる（ibid., S. 382, III, 5, 39.）。この「成った」（factum esse）という表記の難点はドイツ語の「成った」（geworden）と「創造された」（geschaffen）の両方を意味する点であるとマルクシースは指摘した（ibid., Anm. 237, S. 375）。

(28) Ibid.

(29) Ibid., S. 378, III, 4, 34.

(30) Ibid., S. 380, III, 5, 35.

(31) Ibid.

(32) Ibid., S. 380, III, 5, 36.

(33) 凡そ三・四・五巻では神からの生成は「出生した」（natus）として表現され、人からの生成には「成った」（factum esse）が適用されるが、僅かな例外も存在する（ibid., S. 398, III, 9, 59.）。

(34) L. Prestige, 'ἀγέν(ν)ητος and γεν(ν)ητός, and kindred words, in Eusebius and the early Arians' in: *Journal of Theological Studies 24* (1923), p. 490. L. Prestige, 'ἀγέν(ν)ητος and cognate words in Athanasius' in: Journal of Theological Studies 34 (1933), p. 258.

(35) Theodoretus, *Historia ecclesiastica, in: Theodoreti Cyrensis episcopi opera omnia*, t. 3, ed. J. P. Migne (PG 82), Paris, 1864, coll. 879-1278, hic col. 1012. L.Ayres, *Nicaea and Its Legacy: an Approach to Fourth-Century Trinitarian Theology*, Oxford: Oxford University Press, 2004, p. 125.

(36) Ambrosius, *Sermo contra Auxentium de basilicis tradendis* in: Epistulae et Acta, recensuit M. Zelzer (CSEL 82/3), Vindobonae: Hoelder-Pichler-Tempsky, 1982, pp. 297-298, ep. 75, 3, 98.

(37) Ambrosius, *De fide* (ad Gratianum), übersetzt und eingeleitet von C. Markschies, S. 236, I, 18, 122.

(38) C. Markschies, *Ambrosius von Mailand und die Trinitätstheologie*, S. 190.

(39) L.Ayres, op.cit. p. 35.

(40) Ibid.

(41) ここで注意したいのがニカイア派にとって批判の対象はあくまでアルミニウム公会議であって、その見解がより体系化されたコンスタンティノープル公会議ではないという点である（Ibid.）。

(42) Philastrius, *Liber de haeresibus, in: Sancti Philastri opera omnia*, t. 1, ed. J. P. Migne (PL 12), Paris, 1845, coll. 1049-1302, hic col. 1179.

(43) Eusebius vercellensis, *De trinitate confessio*, in: *Sancti Eusebii episcopi vercellensis opera omnia*, t. 1, ed. P. J. Migne

(PL 12), Paris, 1845, coll. 953-968, hic coll. 965-966.

(44) Ambrosius, *De virginibus libri tres*, in: *Sancti Ambrosii Mediolanensis episcopi opera omnia*, t. 2, ed. J. P. Migne (PL 16), Paris, 1845, coll. 187-233, hic col. 220.

(45) Ambrosius, *De virginitate liber unus*, in: *Sancti Ambrosii Mediolanensis episcopi opera omnia*, t. 2, ed. J. P. Migne (PL 16), Paris, 1845, coll. 263-305, hic col. 271.

(46) Ambrosius, *De Cain et Abel libri duo*, in: *Sancti Ambrosii Mediolanensis episcopi opera omnia*, t. 1, ed. J. P. Migne (PL 14), Paris, 1845, coll. 315-361, hic coll. 320-321.

(47) D. H. Williams, 'Polemics and Politics in Ambrose of Milan's De Fide', p. 526.

(48) *Palladi ratiarensis fragmenta*, in: *Scholia in concilium Aquileiense: in quibus legumtur maximini episcopi dissertation et palladi ratiarensis fragmenta* (Paris, *Bibl. Nat.*, ms. lat. 8907), cura et studio R. Gryson (CCSL 87/2), Tumholti : Brepols, 1982, pp. 174-175, 337r. 1-14.

(49) D. H. Williams, 'Polemics and Politics in Ambrose of Milan's De Fide', p. 527.

(50) Ambrosius, *De fide*, recensuit O. Faller (CSEL 78), n. 1-18, p. 120.

(51) Ἀθανάσιος / Athanasius, *κατά αρειανών λόγος* / *Orationes adversus arianos*, in: ΤΟΥ ΕΝ ΑΓΙΟΙΣ ΠΑΤΡΟΣ ΗΜΩΝ ΑΘΑΝΑΣΙΟΥ *ΤΑ ΕΥΡΙΣΚΟΜΕΝΑ ΠΑΝΤΑ* / *S.P.N. Athanasii archiepiscopi alexandrini opera omnia*, ed. J. P. Migne (PG 26), Paris, 1887, coll. 1-525, hic col. 144.

(52) Ibid., col. 164.

(53) Ibid., col. 169.

(54) Ibid.

(55) Ibid., col. 172., ibid., col. 174.

(56) Ambrosius, *De fide* (ad Gratianum), übersetzt und eingeleitet von C. Markschies, Anm. 241, S. 378-379.

(57) C. Markschies, *Ambrosius von Mailand und die Trinitätstheologie*, S. 176-177.